知覚のきめ細かさからの論証に対して概念主義を擁護する
Defending Conceptualism against the Argument from Fineness of Grain of Perception

岡部幹伸

Abstract

Is perceptual content conceptual? This problem is one of the most-focused issues in philosophy of perception. Non-conceptualism, according to which perceptual content is non-conceptual, holds that the fine-grained nature of perception yields a good argument against conceptualism. Non-conceptualists claim that perception is not conceptual because it is too fine-grained to be captured by concepts. Conceptualists, however, reply that "demonstrative concepts" is possible and such concepts could object-dependently capture perceptual content. This paper aims to refute the argument from fineness of grain of perception and then to show that demonstrative concepts could play an essential role in McDowell's therapeutic philosophy.

(1) 研究テーマ

知覚経験の内容は概念的であると主張する立場は、一般に概念主義と呼ばれている。もし知覚が概念的でないとすると、非概念的な知覚が概念的な信念をいかにして正当化できるかという問題が生じるように思われる。私は赤いリンゴがそこにあるという知覚をして、赤いリンゴがそこにあるという信念を獲得する。このとき、この信念を知識たらしめるのは私がしたリンゴの知覚である。概念主義をとる利点の一つは、知覚と信念のこのような正当化関係を問題のないものにできることにある。

しかしながら、概念主義に対してはいくつかの異論が提出されている。その一つが知覚のきめ細かさからの論証であり、知覚は概念によってはとらえきれないほどきめが細かく、知覚の内容と概念的内容一般にはギャップがあるため、知覚は概念的ではないとするものである。本稿は、この論証およびそれに対する概念主義者からの応答（直示的概念による応答）を検討し、知覚のきめ細かさからの論証に反論することを目指す。その後、知覚の哲学の局所的な論争テーマにすぎないと思われがちな直示的概念が、マクダウェルの治療としての哲学において、重要な役割を担いうることを示す。

(2) 研究の背景・先行研究

おそらく、経験の内容をすべて捕捉できるほど多くの概念を我々が持っているとは信じられないという直観が、知覚の非概念性を主張する一番大きな動機となっている。「赤」や「ピンク」といった色概念しか使うことができないのなら、我々が経験する微妙な色の移り変わりを概念が捉えることなどありそうもないように思われる。たとえば、赤 19 と赤 21 を私は現象学的に異なったものとして経験する。同じ赤でも色合いが違い、私はそれに気づいているのである。しかし、両者を区別して記憶しておくことはできないということはあるだろう。そのようなとき、ペンキ屋に行って、特定の赤色を選び出すことはできないはずだ(Tye 2000, 11; 61)。というのは、私は両者を区別して記憶できていない、すなわち再認することができないからである。これは赤という概念はもっていても、それ以上細かい概念をもっていないということではないのか。このような現象学的な論点はエヴァンズによって「我々が感覚的に識別できる色合いと同じほど多くの色概念を我々がもつという提案を、我々は本当に理解するだろうか？」(Evans 1982, 229)と明確に表現され、概念主義論争での主要な争点となった。

ヘックはこの困難を「時間が欠けているのではなく、記述的資源が欠けている」(Heck 2000, 490)と表現する。細かすぎるために、人間の一生が終わるまでには、あるいは太陽が膨張して地球を飲み込むまでには経験内容の記述が終わらないということではない。そもそも概念によって記述し、経験の内容を特定しようとしてもそれが叶わないということなのである。その理由こそ、我々のもつような概念が、我々が識別できる色合いよりもきめが粗いというものである。

経験の内容が概念よりもきめが細かいという主張に対して、概念主義者はどのように応答できるだろうか。『心と世界』においてマクダウェルは、直示的概念というものを認めることで、経験の内容を概念が捕捉できるようになると言う。

> 主体の概念能力を超えているとされる種類の経験――仮定により適切な見本を与えてくれる経験――のただなかにあって、主体は「あの色合い」といった句を発話することによって、当の経験と正確に同じきめ細かさをもつ概念に言語的な表現を与えることができる。「あの色合い」のなかで、直示語は見本の現前を利用する。(McDowell 1996, 56-57〔邦訳、102頁〕)

直示的概念を用いる能力とは、短時間にすぎなくても、色見本を提示されたなら当の色なのかどうか答えることができるような再認の能力である。ポイントは、経験をする前から予め概念をもっている必要がなくなるということである。このような能力は、当の経験を離れてどういう能力なのか言うことはできず、直示的概念もその経験を離れて成立するようなものではない。このような概念を見落としたことに対して、マクダウェルはエヴァンズを批判する。

直示的概念を認めれば、経験内容のきめ細かさからの論証をかわすことができる。しかし、直示的概念に対しては、いくつかの異論が提出されている。

ピーコックは直示的概念はきめが細かすぎると批判する。ピーコックによれば、形を知覚するとき、三つの異なるレベルがあるという(Peacocke 1998, 381)。

(ⅰ)形そのもの
(ⅱ)経験において知覚された形
(ⅲ)「あの形」「あの正方形」といった発話で捉えられる直示的に概念化された形[1]

マクダウェルは(ⅲ)によって(ⅱ)を説明しているとピーコックは考える。色の例がわかりやすいのでそれを用いる。「あの色合い」「あの赤」「あの緋色」といった直示的概念はすべて異なる概念であろう。だが、これらの概念のどれもが経験において知覚された同じ色を指示するということがありえる。二人のひとが、ひとりは「あの赤」で、もうひとりは「あの緋色」で同じ対象の同じ色を指すことがありえるのである。「あの赤」と「あの緋色」は異なった概念だが、直示的概念として捕捉すべきは同じ対象の同じ色という程度までの識別可能性である。二人がそれぞれ「あの赤」「あの緋色」によって対象の色を捉えるのは不必要なきめの細かさを用いているのである。

この二人が同じ対象の同じ色を知覚しているという直観を退け、経験の内容、および経験の内容の捕捉が「あの赤」「あの緋色」というレベルで個別化されると考えるのはどうだろうか(Kelly 2001b; Ablondi 2002)。画家や室内装飾家という色の専門家の経験の内容が、一般人の経験の内容とは異なるというのはもっともらしい。それなら、それぞれの経験が同じ対象の色についてのものだったとしても、経験の内容が異なるのだから、直示的概念が不必要にきめが細かいということにはならないと思われるかもしれない。しかし、ピーコックが指摘するように、「あの赤」「あの緋色」でそれぞれの経験は個

別化されるとしても、なおもそれぞれの経験に共通する要素が残り続けるのである(Peacocke 2001, 610)。いわば指示のレベルをこの方針は取り逃がすことになる。

直示的概念を用いる際に「赤」や「緋色」といった一般概念を使うから問題が生じるのなら、すべて「それ」で押し通し、自分を中心にした空間の位置関係を補足することで問題を回避できないだろうか。しかし、「それ」だけでは「その表面」なのか「その色合い」なのか「その質感」なのか「その形」なのか決定できないだろう。経験の内容を推論にもたらすなら、直示的概念がどのような種類についてのものなのかはわかっていなければならない。それゆえ、一般概念は必要で、この方向で問題を回避することはできないとピーコックは指摘する(Peacocke 1998, 382)。このように、たんに「それ」がすべてを問題なく指示しうると言うことはできず、この方向では解決ができない。ピーコック自身は後に、色や形といった諸性質の中のどれが与えられるにせよ、一つの与えられ方によって与えられる性質は一つだけなのだから、与えられ方が固定されれば、「色」や「形」で補足されなくても済み、「それ」だけでよいと主張する(Peacocke 2001, 610-11)。だが、経験の内容の与えられ方を固定するためには、対象の色が与えられているのか形が与えられているのか決定しなければならないので、非決定性は回避できないはずである。どのみち「それ」がすべてを問題なく指示しうると言うことはできない。

(3) 筆者の主張

結局のところこの問題に対しては、ケリーが示唆した、「その色合い」というレベルで同じものを指す可能性を探るべきだろう(2)(Kelly 2001b, 226-7)。実はピーコックは、「あの赤」「あの緋色」という直示的概念を用いる二人について、どちらも「色合い」という一般概念を欠いているという不当な制限を課していた。しかし、この制限を取り払うなら、「その色合い」という表現を用いることによって、経験の内容とちょうど同じきめ細かさで経験の内容が概念的であると言えるだろう(3)。

ところがタイは、「その色合い」にしたところで、色に注意を向けてそのような概念を形成したりすることなく、経験を享受することが可能なのだから、直示的概念は役に立たないと主張する(Tye 2000, 61; 75)。だが、このタイの指摘は妥当なものではない。直示的概念のポイントは、問題となる知覚経験の前にあらかじめ概念を主体が持っている必要がないということにあるからである。そして、マクダウェルによれば、再認能力が持続している限り、その経験が終わったあとでも概念には明確な表現が与えられうる(McDowell 1996, 171〔邦訳、277〕)。タイの批判は直示的概念の狙いを理解していない

ものでしかない。

ヘックは、直示的概念の指示対象の固定の問題を議論している(Heck 2000, 494-498)(4)。「その色」と言って私の机の一部の色を指すとする。このとき、知覚が真正なものならば、「その色」の指示は現実の机の色によって固定されるだろう。しかし、私が誤知覚をしているならばどうだろうか。たとえば、目の不調によって、実際の茶色よりも赤みがかった茶色を経験することもありえるだろう。この場合、「その色」によって現実の机の色が指示されるなら、経験の内容を「その色」という直示的概念によって特定することはできないことになる。なぜなら、誤知覚の場合の経験の内容は、現実の机が持つ茶色ではなく赤みがかった茶色だからである。このようにして、直示的概念の指示が現実の見本によって固定され、それによって経験の内容を特定するということには抵抗したくなってくる。

それならば、直示的概念の指示は、現実に机が持つ色ではなく、私に見える色によって固定されると考えるのはどうだろうか。ヘックは、このようにすれば直示的概念の指示の問題は解決すると考える。しかし、直示的概念の指示は世界の側の色見本によって決まると主張するマクダウェルにとって、この方針は受け入れがたい。ヘックはマクダウェルの反応は次のようなものになるだろうと言う。すなわち、知覚の哲学において選言説をとるマクダウェルは、ヘックのこの議論に対して、この議論は錯覚論法と同様であり、誤知覚と真正な知覚のあいだに共通要素はなく、誤知覚の場合を持ち出して真正な知覚経験の内容を直示的概念によって特定することに反対するのは間違っていると言う、と。

これに対してヘックが論じるのは、内容の理論について、選言的なものは見込みがないということである。それが真なら雪は白いという内容を持ち、それが偽なら雪はピンクという内容を持つ、選言的な信念を考えよう。このような信念は悪循環に陥る。どちらの内容なのか特定するには、この信念が真か偽か決定しなければならない。しかし、真偽を決定するには内容が確定していなければならない。前もって真偽と内容のどちらも知ることができないので、ここから抜け出せないのである。

同様のことが知覚の内容についても言えるとヘックは主張する。選言的な説明では、知覚状態が真正なものであるかが、知覚状態の内容が何であるかに先立つことになる。しかし内容がわからなければ真正かどうかも決められないので、このような理論は見込みがないというのである。

これに対して何が言えるだろうか。ヘックのこの議論は、内容についての選言的な説明に対しての批判としては成功していない。選言説は、主体が A

またはBという内容の経験を享受すると主張する立場ではない。主体が経験するのはAだけ（またはBだけ）なのである。そして、AとBが主体からは区別できないというにすぎない。ヘックの議論が当てはまるのは主体がAまたはBという内容の経験を享受すると想定した場合だけである。主体の内的な観点からは経験が真正なものかはわからないが、内容は客観的に決まっている。主体が経験するのは選言の片方のみだということがわかれば、内容の非決定性も生じないのである。

ヘックのような反応はおそらく、心の領域を主体にとって不可謬なものにしたいというデカルト以来の認識論に特徴的な願望に由来している。「完全なデカルト的描像においては、内的生〔筆者注：心〕は自立的な領域で起こり、それは主体の内観的気づきに透明である」(McDowell 1986, 236)。デカルト的描像最大の問題は、不可謬なものだけからなる心という領域に閉じ込もって安定した足場を確保しようとしたあげく、世界を喪失することにある。直示的概念の指示が現実に机が持つ色ではなく、私に見える色によって固定されるなら問題がなくなると考えたヘックの考えは、デカルト的描像そのものである。幻覚や錯覚の場合にも直示的概念を機能させようとして、真正な知覚と共通するとされる主体に対する見えに後退し、この見えが直示的概念の指示を決定すると、おそらくは彼なりに最大限好意的なかたちで論敵を解釈する。しかしこれはマクダウェルが拒否しようとする描像そのものであるから、マクダウェルによって拒否されるのは当然である。にもかかわらず、ヘックはデカルト的描像を克服するという背景に目を向けないまま、選言的な説明を斥けようとするのである。

我々は、直示的概念は真正な知覚においてのみ有効な概念だと結論すべきである。その指示対象が存在すると誤って思われている場合などは、そもそも直示的概念を使った知覚内容の同定に失敗している。直示的概念を導入する当初の眼目が、真正な知覚内容を概念的に捉える方法を明らかにすることにあったのだから、幻覚や錯覚の場合にも内容の特定に成功するような説明は、初めから求められていないのである。我々は「その色」と言って指示に失敗することもあるが、指示の失敗はありふれたことなのである。

ここでより広い文脈に位置づけるなら、直示的概念は対象依存的な思考の一種だということが重要である。マクダウェルによれば、見知りによる知識というラッセルの概念は主体にとって不可謬な領域に制限される必要はない(McDowell 1986)。見知りによる知識によって構成されるラッセル的思考は、世界の中の対象そのものをその内容の一要素として持つ。その意味で、そのような思考は対象依存的である。見知りによる知識が（それについて誤りう

る）日常的な対象にまで拡張されるなら、知覚によって世界の事物を認識するとき、その内容は世界にどんな対象が存在するかによって決まるという常識的な考え方を問題のないものにすることができる。そのような対象が存在しなかったなら、そのような思考はたんに成立しないだけであり、直示的概念も同様なのである。

(4) 今後の展望

以上のように、直示的概念は「その色合い」というレベルで個別化されるべき対象依存的な思考である。知覚のきめ細かさからの論証に対して、概念主義の側が直示的概念によって応答するという道は閉ざされていないし、その背景にあるデカルト的描像を克服するという動機に照らせば、正当なものであるだろう。

直示的概念による応答それ自体は、あくまでも論敵に対する反論であり、概念主義を積極的に論証するものではないと言われることがある(Coliva, 2003; Bermúdez and Cahen, 2020)。しかし、本稿のようにマクダウェルによる心と世界の関係に関する治療の細部を埋めるものとして、直示的概念が整備されるならば、この概念は概念主義の積極的な擁護に役立ちうる。

最後に、概念主義を擁護する別の方法として、知覚のきめ細かさからの論証そのものを単に拒絶することもできるかもしれないという選択肢に触れておく。本稿の冒頭において、概念主義を採ることで、知覚と信念の正当化関係を問題のないものにすることができると言った。それに対して、これまで論じてきたように、知覚のきめ細かさが重大な反対根拠になりうると思われたのである。しかし、ここで検討する方法によれば、知覚と信念の正当化関係にとって、知覚のきめ細かさはそもそも反対根拠になるようなものではない。ひとが正当化できるのは、きめの粗いレベルまででしかなく、きめの細かい内容は初めから概念的に捕捉する必要がないということになる。そのため、知覚のきめ細かさからの論証は問題にならなくなる。

しかしながら、その立場が仮に整合的だったとしても、それはもはや概念主義と呼べるものであるかは定かではない。概念的でないが正当化にも寄与しないような知覚内容というものを認めることは、知覚経験の内容は全て概念的であるわけではないする非概念主義にむしろ近くなっているようにも思われる(5)。概念主義という立場を敢えて押し出すのであれば、本稿で展開したような知覚のきめの細かいレベルまで概念的だという概念主義の方がその名にふさわしいだろう。そのため、非概念主義者が概念主義に対する反論として知覚のきめ細かさからの論証を持ち出したのは正しいが、それに対しては直示的概念によって応答可能だということを本稿は示した。そしてそれを

踏まえれば、概念主義は依然として有効な立場であり続けるのである。

注

(1) この三つのレベルの表現について、ピーコックそのままではなく、Kelly (2001b)を参考にしている。

(2) ケリー自身は知覚の状況依存性という概念主義を取らない理由をもっているので、示唆しただけにとどまる。

(3) ところで、ひとつ確認すべき修正点がある。マクダウェルが、ピーコックらの批判を承けて、『心と世界』において「その色合い(that shade)」の代わりに「そのように色づいている(is colored thus)」という表現を使うべきだった、と言っているのである(McDowell 1998, 415, 416-7)。さらに、そのように言うことで、『心と世界』においては経験の内容が命題的なものであることが明確になるだろう。ただし、我々の論点には影響してこないので、引き続き「その色合い」を用いる。

(4) 同様のことにケリーも懸念を表明している Kelly(2001a, 398,n.2)。

(5) 概念主義が知覚の内容は全て概念的であるいう立場だとすれば、非概念主義は知覚の内容は全て概念的であるわけではないという全称の否定になる。よって、知覚内容の一部が概念的であっても非概念的内容を認める立場は非概念主義として分類される。Schmidt(2015, ch.3)を参照。

(5) 参考文献

Ablondi, F. (2002) “Kelly and McDowell on perceptual content”, *Electronic Journal of Analytic Philosophy*, Issue 7, URL=<https://ejap.louisiana.edu/EJAP/2002/Ablondi.html>

Bermúdez, J and Cahen, A. (2020) “Nonconceptual Mental Content”, *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, URL=<https://plato.stanford.edu/entries/content-nonconceptual/>

Coliva, A. (2003) “The argument from the finer-grained content of colour experiences: A redefinition of its role within the debate between McDowell and non-conceptual theorists”, *Dialectica: International Journal of Philosophy of Knowledge*, 57(1), pp. 57-70.

Evans, G. (1982) *The Varieties of Reference*, Oxford: Clarendon Press.

Heck, R.G. (2000) “Nonconceptual Content and the "Space of Reasons"”, *The Philosophical Review*, Vol. 109, No. 4, pp.483-523.

Kelly, S. (2001a) “Demonstrative concepts and experience”, *The*

Philosophical Review, Vol. 110, No. 3, pp 397-420.

——(2001b) “The Nonconceptual Content of Perceptual Experience: Situation Dependence and Fineness of Grain”, reprinted in Y.H. Gunther (ed.) *Essays on Nonconceptual Content*, Cambridge, Mass: The MIT Press, 2003.

McDowell, J. (1986) “Singular Thought and the Extent of Inner Space”, reprinted in his *Meaning, Knowledge, and Reality*, Cambridge, Mass: Harvard University Press.

—— (1996) *Mind and world：with a new introduction*, Cambridge, Mass: Harvard University Press.（『心と世界』、神崎繁・河田健太郎・荒畑靖宏・村井忠康訳、勁草書房、2012 年）

—— (1998) “Reply to Commentators”, *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol. 58, No. 2, pp.403-431.

Peacocke, C. (1998) “Nonconceptual Content Defended”, *Philosophy and Phenomenological Research* ,Vol. 58, No. 2, pp.381-388.

—— (2001) “Phenomenology and nonconceptual content”, *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol. 62, No. 3, pp.609-615.

Schmidt, E. (2015) *Modestnonconceptualism: epistemology, phenomenology, and content*, Cham: Springer.

Tye, M. (2000) *Consciousness, Color, and Content*, Cambridge, Mass: The MIT Press.

（慶應義塾大学）